

## 「はじめて書かれたイギリス論」―その三

―近藤守重『伊祇利須紀畧』と一次資料―

海 老 久 人

本稿は、当該紀要54号註釈で各項末に「↓文書名」と記した守重の一次資料名をあいいうえお順に掲げ、かつ各資料内容を引用している。

附文書（引用文中「ママ」は各文書原本表記を踏襲していることを示し、

【】は筆者注、（ ）は原本欠字の補完箇所である）

《あ行》

### ▲『伊祇利須情迹叙略』

寛政九丁巳年七月

松前家より御用番戸田采女正殿江届書之写

私領分東蝦夷地エトモ与申所江当月十九日

夜異國船一艘漂着候由蝦夷人共より同所連上屋

番人共江申達候付最前アハタ「ママ」与申所ニ罷越候

家来江飛脚を以申達右家来之者より昨廿三日夜

飛札を以申越候尤異國船之儀國名人数等ハ

勿論何國より何方江相越候船に御座候哉右等之趣共

一切相分不申候且異國船ハ大凡三四百石積位にて

相見江候由にて御座候依早速為見届通弁之者

差遣申候其外固之人数等申付置候前書

見届之者より右往反次第尚又巨細御届可申上候

其上隣國江も案内可申遣候先此段御届申上候

以上

七月廿四日

松前若狹守

先達而御届申上候私領分東蝦夷地エドモ「ママ」江

漂着之異國船為見届通弁ヲ差遣候家来共より

昨廿九日申越候ハ右異國船江罷越致懸合

候處アンゲリヤ國船ニ而支那<sup>シナ</sup>カント<sup>東</sup>ン江商ニ参候由

然處水木切<sup>キ</sup>し昨年も参り此所之様子を

存候間水木弁用致度参候趣相答候尤乗組

人数三十四人頭分名前ブラッソ<sup>ン</sup>并下人共迄去年

参候者共多く御座候由異國船長サ十三尋幅

一丈六尺有之候右船當巳二月五日アンゲリヤ出船

ハラシリヤ江参夫よりイワヤゴウランデヤ江参夫より

此處江參候由船中積物は米茶煙葉砂糖之類  
賣次第二帰帆可仕旨申達候尤海岸固メ人数之儀は

去月廿五日より追々在所出立仕候一体去年

今年相續致來着候段旁以不相濟儀ニ付

向後當國江趣キ水木之用弁ニ而も罷越候義ハ

堅不相成旨異國人共江可申渡之旨家來共ヘ

申付遣候若於彼地異國人滯留中致上陸

不法之儀等も有之節ハ早速召捕可申旨をも

申合候尤南部大膳大夫津輕越中守家來

方江も私家來共より案内為申遣候委細之儀ハ

追々可申上候ヘ共彼地家來共より注進之趣

御届申上候以上

閏七月朔日 松前若狹守

↓〔註13〕

▲『異國日記』(1)

一同【筆者註…慶長十四己酉年孟秋七糞】十一日此於 御本丸本上州被仰候

ハヲランタヨリ御書ヲ上候彼國ノ文字ニテ分不見候通事ニ假名ニノベ

サセラレ候以來船ヲ渡可申候間湊ヲモ被下往來仕候様ニトノ義ニ候印

子ノ盃二糸三百五十斤ナマリ三千斤象牙二本上候此返書認下書上可申

由也圓光寺御書候此書ハ少文體可然様ニト仰ニ候

日本國主 源家康 復章

阿蘭陀國主 殿下

遠傳 信書披而見之則近如對高顏殊投贈四種之方物歡悅有餘抑縱 貴

邦遣異域兵船大將裨將許多軍衆之内到着本邦松浦津殊與陋邦可有和睦

堅盟予所希也兩國同志則縱雖隔千里之海陸年々往來何有異哉於陋國正

無道令歸有道也依之渡海商客安居必矣 貴邦眞如路數人遣置本邦可披

立館舍之地着船之湊任貴國意分與之自今以往彌可修隣交者也餘事付在

船主舌頭惟時秋天殘暑尤甚而已自齎不備

慶長十四龍集己酉孟秋二十五糞

御朱印ハ七月廿一日ニ被押候也

一同十七日於御本丸本上州被仰渡候ハおらんたへ日本ノ文體ニテ御

朱印可被遣文言調御右筆ヘ可申渡由也則一紙ニ此一ツ書給候

ばたん

一ぢやくす名字 くるうんべいけ名也

じやはん

一ふらんす ひつたる

一あふらはむ はんでんぶつく

一きらあすへいけ

右此四人ヘ當テ所候テ同シ文言ニテ四通調させ候ヘと上州

御申候也

おらんた船日本ヘ渡海之時何之津え雖爲着岸不可有異儀候向後守此旨

可被往來聊疎意有間敷候也仍如件

慶長十四年七月廿五日

ちやくするうんべいけ

↓ [註46]

▲『異國日記』(2)

一 (慶長十八年) 癸丑八月四日インカラテイラ国王ノ使者於駿城御礼申上ル

王ヨリ音信色々進上也此國ヨリハ始テ使者也捧書蠟紙ハ、貳尺タケ

一尺五寸三方ニ縁ニ繪アリ三ツニ折二ツニ折返シテ紙ニテ釘トヂノ様ニシテ蠟印

アリ文言ハ南蛮字ニテ不被読故アンジニ假名ニカ、セ候左ニアリ

文言ハ南蛮字ニテ不被読故アンジニ假名ニカ、セ候左ニアリ  
ぜめし帝王書状之趣者天道之御影によりおふりたんや國ふらんず國ゑらんだ國これ三ヶ國之帝王ニ此十一年以来成申候

〈中略〉

一 伊伽羅諦羅へ御返書可被遣旨被仰出候いから國色々ニ名ヲ申候間書付越候へと後庄三迄申遣候処ニあんしかたよりかきつけ來國ハいからたいら又ハげれほろたんとも申候いづれも國ハ一ツなハ二ツ御さ候とかきつけ上ル間當字ニ如上書遣ス伊伽羅へ御書下書八月廿八日 御前へ御目ニ掛文牒御氣ニ入九月朔ニ清書スル

日本國 源家康 復章

伊伽羅諦羅國主 麾下

「はじめて書かれたイギリス論」―その三―

↓ [註6] [註48]

▲『異國日記』(3)

右之外ニ御右筆庄与三書テ御朱印被遣也案左ニアリ

いきりすより日本へ今度初而渡海之船萬商賣方之儀無相違可仕候渡海仕付而ハ

諸役可令免許事

一 船中之荷物之義ハ用次第目錄ニして可召寄事

一 日本之内何之湊へ成共着岸不可有相違若難風帆楫絶何之浦々へ寄候共

異儀有之間敷事

於江戸望之所ニ屋敷可遣之間家を立致居住商賣可仕候歸國之義(者何時にても)

いきりす人可任心中付立置候家はいきりす人可爲人儘事

一 日本之内ニ而いきりす人病死なと仕候者其者之荷物無相違可遣之事

一 荷物押かい狼藉仕間敷事

いきりす人之内徒者於有之者依罪輕重いきりすの大將次第可申付事

右如件

慶長十八年八月廿八日

御朱印

いんきらていら

此御法度書ニ通被遣一通ハ渡海ノ船ニ置之一通ハいから國ニ可置由也庄与三書之大高一枚

半ツキテツキ目ニウラニ墨印有之あんしニ被遣之由也与三ヨリ案紙來



▲『和蘭航海畧記』

阿蘭陀の商舶東の方咬啗吧日本等の地に渡海するに

初め船をアムステルダムより開帆すアムステルダムは阿蘭陀都城  
のあ留所にて北極の出地五十二度二十三分にして氣候最も

寒し其地に河ありアムステルと云是に依て名つくといえり其港口

に歐羅巴諸國の商船輻輳して最繁華なり阿蘭陀人

此所より船を出して針路を西に求め諸厄利亜海の方に乗る

其海上の視る所西に諸厄利亜<sup>アンゲリヤ、エグレス、</sup>思可齊亜<sup>スコシヤ、</sup>喜百利泥亜<sup>イペリニヤ、</sup>の三島

あり此三島を総稱してゴロートブリタニヤといふ又東に

拂郎察<sup>フ랑스</sup>あり此國の渚と諸厄利亜との境の峽<sup>せま</sup>を舶

師の詞にカナールと云へり拂郎察人はマンセといふ阿蘭陀人

はモウといえり譯して袖といふ義なり此峽<sup>せま</sup>の形衣服の

袖に似たるにより此名ありその峽の幅六七里に過ずといえり

和蘭里數ノ以下皆同諸厄利亜<sup>アンゲリヤ</sup>ハ西洋中の大島にて北極の出地五十度より

五十六度に及ふ其人慄悍<sup>ヒョウカン</sup>にして智あり水戰を善し諸の技藝

に長ぜり此國の内ロンドンといふ所ハ自鳴鐘<sup>ジメインヤウ</sup>の細工天下第一にて

他國に及ふ所に非ズなり

↓〔註15〕〔註66〕

▲『阿蘭陀地球圖說』(1)「阿蘭陀地球圖說卷之一」

國々里數算法

每一度拂郎察國ノ里法二十里 阿蘭陀陸里ニ積リ 一里無二分

〈中略〉

「はじめて書かれたイギリス論」―その三―

全 諸厄里亜國 六十里 全 無里三分里之一

全 思可齊亜國 五十里 全 全三分里之一ト四分

↓〔註83〕

▲『阿蘭陀地球圖說』(2)「阿蘭陀地球圖說卷之二」

書ニ云ク漢又利亜人ヨーハンダーヒツツト云シ人千五百八十五年亜  
墨利加ノ北グルーランラント夜國ノ西方ニ當テ北西ニ流ル、大ナル道  
路ヲ見開ケリ彼ノ漢又利亜人ノ名ヲ以テ名テ羅德意牟語フレテム  
ダーヒツツイ阿蘭陀語スタラートダーヒツツト云フ此ニダーヒツツ  
之峽ト譯ス又曰ク此ダーヒツツ之峽ニ不遠ル所羅德意牟語フレテム  
ムヒユツソニス阿蘭陀語スタラートヒユツソント云ル所有リ此ニヒ  
ユツソン之峽ト譯ス共ニ漢又利亜人見開ル所ニシテ此峽ノ西ノ入海  
有リ名テバーイハンヒユツソント云フ此ニヒユツソン之峽ト譯ス

↓〔註82〕

▲『阿蘭陀風說書』(1)

第十三號 寛文六年(西紀一六六六年)風說書 其一

咬啗吧出壹番船之阿蘭陀口書

一、南蠻人居申候クチンと申國を、先年阿蘭陀取堅め居申候處に、

此内ホルカと申在所者、クチンより五六里程御座候處に、エゲ

レス國より爲商賣船を乗駈け參申候間、此方より申に者、ホル

カ者クチンの内に而有之候處に、何とて案内なしに商賣に參申

候哉、罷歸申候得と使を立申候得者、エゲレス申候者、南蠻人

とエゲレス儀者縁者に而候間

↓〔註3〕

▲『阿蘭陀風説書』(2)

第三十六號延寶二寅年(西紀一六七四年)風説書

當年罷渡申候阿蘭陀新カピタン口書

〈中略〉

一、去年當所江入津仕候エゲレス船【筆者注…「リターン」号】、御當地  
出船之後、天川江參、夫よりシヤム江參候由、咬啗吧に而承申候、  
以上。

阿蘭陀古カピタン

ヨワノス・カンブイシ

同 新カピタン

マルテイヌス・セイザル

寅六月廿八日

↓〔註54〕

▲『阿蘭陀風説書』(3)

第三十八號延寶三卯年(西紀一六七五年)風説書其二

當年罷渡申候阿蘭陀新カピタン口上書を参照。

〈中略〉

一、エゲレス國と阿蘭陀國と和談仕候、然る處、エゲレス國中に南蠻  
人之法を弘め申出家共數人居申候を、今度悉く追拂申候、就夫、エゲ  
レス國中之者共、大將に申候者、迎も之儀に南蠻國とエゲレス國との  
縁邊茂きられ候得かしと訴訟申候由、承及申候

〈中略〉

↓〔註34〕

▲『阿蘭陀風説書』(4)

第四十四號延寶六午年(西紀一六七八年)風説書其二

當年罷渡申候新カピタン口上書

〈中略〉

一、去年十月阿蘭陀國の大將エゲレス國大將の姪聲に罷成申候由申  
越候。

〈中〉

古カピタン

アルブルト・フレイヒン

新カピタン

デレキ・デ・ハアス

↓〔註32〕〔註38〕

▲『阿蘭陀風説書』(5)

第五十四號貞享元子年(西紀一六八四年)風説書其二

風説書

〈中略〉

一、デヌマロカと申所の國主の子を、エゲレス國主の姪聲に仕候。

〈中略〉

古カピタン

コンスタンテン・ランス

新カピタン

ヘンデレキ・ハン・フイトノム

↓ [註39]

▲『阿蘭陀風説書』(6)

第五十八號貞享三寅年(西紀一六八六年) 風説書其二

風説書

〈中略〉

一、エゲレス人者、惣而阿蘭陀同宗に而御座候處、今度守護に立申候弟の妻は、イスパンヤ國之守護之娘に而、數年嫁仕罷在候故、女房之進めに而、バテレン宗門に罷成申候に付、所之者共も同宗門に可仕と申候得共、國中承引不仕候由、本國より申來候。

〈中略〉

古カピタン

アンデレイス・ケレイル

新カピタン

コンスタンテン・ランス

↓ [註35]

▲『阿蘭陀風説書』(7)

第六十四號元祿二巳年(西紀一六八九年) 風説書其二

「はじめて書かれたイギリス論」―その三―

風説書

〈中略〉

一、エゲレス國の守護、ポルトガル國の聲に而御座候、然る處に、三ヶ年以前守護相果申候、其節弟守護に罷成候刻、國中之者とも申候は、バテレン宗旨に成候はゞ相續難成の由申候處に其時弟申候は、守護を持候而も、バテレン宗に罷成間敷候、殊に家老共も右之者先規之仕置之様に可致と、國中之者共誓約守護に罷成候、其後其身もバテレン宗に罷成、バテレン共を家老に取立、古來の家老役人共を追下げ申候、就夫、國中の者共、バテレン宗に罷成申候様にと申附候得共、承引不仕、段々他國江落行申候、然る處に、殘る國中の者共より、阿蘭陀國江申越者、惣國中バテレン宗に不罷成候はゞ、悉く打殺し可申と申候間、阿蘭陀國より加勢被成、此儀静め被下様にと申來候、子細者阿蘭陀エゲレスは同宗に而、古來より互に和順、何國より軍仕掛候共、加勢可仕と約束仕、其上阿蘭陀人と南蠻人と數年軍仕候折節、エゲレス國の大將之婦者、元より阿蘭陀國智舅之好身を以、阿蘭陀方江加勢仕候、〈中略〉

古カピタン

コルネレス・ハン・オウトハウルン

新カピタン

バルタアサル・スヘイルス

↓ [註36] [註40] [註41]

巳七月廿六日



▲『阿蘭陀風説書』(8)

第六十六號元祿三年(西紀一六九〇年) 風説書其二

風説書

〈中略〉

一、惣而阿蘭陀宗旨と、エゲレス人者同宗に而御座候、エゲレス國の守護、先祖代々阿蘭陀宗旨に而、南蠻人と敵にて御座候エゲレス國中兼而申定候は、阿蘭陀同宗を替、他宗に罷成候守護之儀者、相續仕せ間敷と堅申定候、然る處に、此守護バテレンを連々國中に入込せ、阿蘭陀宗旨を替、伴天宗旨を勸申候に付、先規より國中の申定を破、國之仕置等も我儘に申掛候に付、エゲレス國三國之者共も、亂國の躰に罷成、〈中略〉

古カピタン

バルタアサル・スクイルス

新カピタン

ヤンデレキ・ハン・フイトイム

右之趣貳人之カピタン申聞候通、和解差上申候、以上。

午七月二日

通詞

↓[註33][註36]

▲『阿蘭陀風説書』(9)

第六十七號寶永四亥年(西紀一七〇七年) 風説書其二

風説書

〈中略〉

一、去年エゲレス船咬啗吧江參候、右之船に伴天連五人エゲレス人の風俗に似せ紛れ乗、咬啗吧へ參忍居申候を、ゼネラル方より探出、搦取詮議仕候處、ロウマ國邪宗門の惣師なり手印壹枚致所持候、右之書付に唐國江就用事參候由書付御座候、フランス國の守護よりも往來切手壹枚所持仕候、就夫、去冬右五人之伴天連共不殘手錠入、阿蘭陀本國差遣申候、本國において國法に可仕と奉存候事。

〈中略〉

古カピタン

ハルデナンドス・デ・ゴロウト

七月廿五日

新カピタン

ハルマアノ・メンセン

↓[註37]

▲『和蘭風説書集成』(1)

第六十號元祿元辰年(一六八八年) 風説書其二

風説書

一エゲレス國之頭役之者共方より、シヤムの守護江使者を以申遣候は、數年シヤム國とエゲレス國と互に商賣仕候處に、下々共、於其地、無法成儀仕出し、今更行當り申候、今度稠敷申渡、以後諸事無禮不仕、堅相守候様にと申付候間、向後如前々商賣を仕候様にと申、大分之進物を差遣し申候、且又此書狀壹通、其許より日本之上様江被差上被下候様にと、右之者相持參仕候由、書面之儀、如何様共及承不申候、尤



エゲレス文字か、又は唐文字ニ而相認申候哉、此段も相知れ不申候、  
當三月此ジャガタラにて風聞承申候由、ジャガタラより申來候、已上、

辰八月二日

右之趣、貳人之カピタン申聞せ候通、和解差上げ申候、已上、

↓〔註55〕

▲『和蘭風説書集成』(2)

第一百號寶永五子年(一七〇八年) 風説書其二

異人申口之覺

一イタリヤ國之内、ロウマ之者ニ而御座候、名はヨワン・バツテスタ・  
シロウテと申候、歳四拾壹罷成申候、

〈中略〉

一……私儀は日本江心ざし參申候處、屋久嶋江着岸仕候付、壹人陸  
江揚り申候、

……

右之趣、ア、デレヤン・ドウと申阿蘭陀人、ラテンと申詞を以、異人  
へ尋掛け申候處、右之通返答仕候由、ドウ申候付、私共和解指上申候、  
以上、

カピタン やすふる・はん・まんすだある

あ、でれやん・どう

子十一月

通詞

通詞目付

↓〔註57〕

「はじめて書かれたイギリス論」―その三―

《か行》

▲『海國聞見録』上卷

小西洋記(二十八ウ)

戈什喀東之沿海地名有三日網礁臘係英機黎埔頭日房低者里係佛蘭西  
埔頭日呢顏八達係荷蘭埔頭西之沿海地名有二日蘇喇日網買皆英機黎  
埔頭其地俱係紅毛置買所建也

〈中略〉

大西洋記(三十四ウ／三十五オ)

○英機黎一國懸三島於各因黃祁荷蘭佛蘭西四國之西北海自各因沿海  
而東繞俄羅斯自俄羅斯而東至細密里也皆為此海不能行舟海冰不解故  
為冰海自各因而南至鳥鬼諸國皆為大西洋紅毛者西北諸番之總名淨鬚  
髮披帶赭毛戴青毡卷笠短衣袖緊襪而皮履高後底畧與俄羅斯至京師者  
相似高準碧眸間有與中国人相似身長而心細巧瓦製作皆堅緻巧思精於  
火礮究勘天文地理俗無納妾各國語言各別以摘帽為禮而尊天主者惟干  
絲臘是斑呀葡萄呀黃祁為最而辟之者惟英機黎一國產生銀哆囉呢羽毛  
毛緞啤吱玻璃等類

↓〔註28〕〔註70〕

▲『華夷通商考』下(廿一ウ、三十八オ／三十八ウ、四十一ウ)

阿蘭陀

海上日本ヨリ一万二千九百里。

〈中略〉

エケレス イギリス 日本ヨリ一万千七百里

寫也。人物阿蘭陀人ニ似リ。昔ハ平戸ニ數年入津セ

シカ。商賣益ナキヨシ。江府エ達メ不來シカ。寛文十

三年五月ニ。又長崎ニ一艘入津セシカトモ。免許ナク

七月ニ帰帆ス。船モ阿蘭陀ニ同シ。

右之國、昔ハ日本ニ來リシカ。當今停止セラレテ。不

來ナリ。イギリス國ハキリシタントハ。又別ナル國ノヨシ。

南蠻船停止。寛永十五年ヨリ也。

〈中略〉

自長崎異國路程

インゲレス 一万二千六百七十五里

↓〔註8〕〔註15〕〔註23〕

▲『外國通信事畧』（傍線は原文）（三十七ウ／三十八オ）

漢又刺並

此國の事は此方にてハインガラテイラ ヲトブリタンヤ インギリ

ス エンゲレスなどゆう事なり慶長十八年にはしめて書を奉りて御

返書をなされしなり

↓〔註6〕〔註48〕〔註59〕

▲『外蕃通書』（1）『外蕃通書第二十七冊 漢又刺並國書』（百八十七頁）

異國日記ニ、十八年八月四日、インカラテイラ國王ノ使者、於駿城

御禮申上ル、王ヨリ音信物色々進上也、此國ヨリハ始テ使者也トミ

エ、駿府記ニ、八月三日守重按ニ、日記ニハ四日トアリ、孰力はナ

ラン、〈以下略〉

↓〔註48〕

▲『外蕃通書』（2）同右（百八十八頁）

守重按ニ、長崎雜記ニ云、慶長五年、阿蘭陀一所ニ、「エゲレファン

ジ」ト云者相渡リ、阿蘭陀ヤンヨウス同前ニ、慶長十四年日本海渡

御赦免之御朱印被成下候、仍之慶長十七年ヨリ平戸へ十年餘渡海シ

テ、雖致商賈、次第ニ利潤無之故、以來渡海仕間敷由訴之、元和七

年ヨリ渡海止トミエタリ、然レハ此時和蘭ト同シク、御朱印ヲ賜ハ

リコト疑ナシ、慶長十四年七月二十五日ノ御朱印ト同シ、御文言ナ

ルヘシ、併セ考ヘシ、〈以下略〉【筆者注…本文中の「長崎雜記」は『長崎旧

記』の記事に同じ】

↓〔註47〕

▲『外蕃通書』（3）同右（百八十九―百九十頁）

○東照宮賜伊祇利須御朱印

一 いぎりすより日本へ今度初而渡海之船、萬商賣方之儀、無相違可仕

候、渡海仕付而者、諸役可令免許事、

一 船中之荷物之儀者、用次第目錄に而可召寄事、

一 日本之内、何之湊へ成共、着岸不可有相違 若難風に逢帆楫を絶、

何之浦へ寄候とも、異儀有之間敷事、

一 江戸に於て、望之所に屋鋪可遣之間、家を立致居住、商賣可仕候、

歸國之義者、何時にても、いぎりす人可任心中、附立置候家者、い

ぎりす人可爲儘事、

一日本之内にて、いぎりす人病死なと仕候者、其者之荷物無相違可遣事、

一荷物おしかい狼藉仕間敷事、

一いぎりす人之内從者於有之者、依罪輕重、いぎりすの大將次第可申付事、

右如件、

慶長十八年八月廿八日

いんきらていら、

御朱印

守重按ニ、異國日記ニ云、此御法度書一通被遣、一通渡海ノ船ニ置

之、一通ハ「イカラ」國ニ可置由也、御右筆庄與三書之、大高一枚ツギテ、繼目ニ裏ニ黒印有之、「アンジ」ニ被遣候由ナリ、

↓「註一」

▲『外蕃通書』(4) 同右(百九十一百九十一頁)

○伊祇利須呈書長崎立山府中所藏

一日本へ今度初而渡海仕候、萬商買方之儀、御じゆんろに、被仰付可被下候事、

一兩御所様御用之御物之儀者、御目錄を以被仰付可被下候事、

一於日本いぎりすふねの荷物、おしかいらうせき不致様に、被成可被下候事、

一いぎりすふね大風にあい、日本の内何れのみなとへ着申候共、無相違様に被仰付可被下候、何方にても望のみなとに、家を建て賣買可

仕候間、御屋敷可被下候事、

一日本にてかい申候荷物御座候は、其商人相對次第かい取様に、被仰付可被下候事、

一日本人といぎりすの者けんくわ仕候は、理非を御せんさく被成、理非次第有體に被仰仕可被下候事、

一いぎりすへ歸國仕候は、何時にても歸國仕候様に被成可被下候、為仰歸國仕候時者、立申候家を、たまはり候て歸候様に被成可被下候事、

か び た ん

し ゆ か ん

さ の な す

せ に ら る

守重云、此本書長崎立山庫中ニ現存ス、「パツヒール」蠻紙ノコトニ「ペン」鵜壺ヲ切テ筆ニ代ルモノヲ以テ書スルモノ、其紙縦六寸五分許、横九寸許リ、尋常和蘭ノ封書ノ如クニ折テアリ、予カ目睹手寫スル所ナリ、按ニ、長崎雜記ニ云、寛文三【筆者註：十三】癸丑年、延寶元年ナリ、五月二十五日、長崎へ「エケレス」船着船、先年平戸へ交易ノ爲、連年渡海ス、其後四十餘年中絶シケルニ、今又渡海交易ヲ願ノ由、則江戸へ建白アリケレトモ、御許容無之、同年七月二十六日、「エケレス」船逐ヒ皈サル云々、「エケレス」此度御朱印可致持參處ニ、數十年中絶故カ、日本渡海御赦免ノ由ニテ、差出候物令披見處、御朱印ニテハ無之、

平戸ヨリ持渡候日本文字ノモノニテ候、此時ニ至テ、御朱印ノ様子不分明ナリ、西川カ長崎夜話ニ、眞の御朱印をは國王の藏にをさめ置たれば、それを透うつして持渡れりとかやトイヘルハ傳聞ノ誤ナリ、今按ニ、是ハ慶長十八年八月、「イギリス」初テ渡來ノ時ニ上ル處ニシテ、其證ハ、同時ノ御朱印御條目ノケ「ママ」條ニ併セ考ヘシ、【筆者注】本文中の「長崎雜記」は『長崎日記』の記事に同じ】

↓【註53】

▲『憲教類典』二ノ廿二 長崎 異國

元和二丙辰年八月二「ママ」日

條々

- 一 自伊祇利須至日本國渡海商船於平戸可賣買他所不許之縱雖遭風濤之難至本邦之地不可有異儀并諸役免除事

- 一 船中資財隨所思以目錄可召寄事
- 一 不可有押買狼藉事
- 一 彼國人若有令病死之輩者其荷物不可有相違事
- 一 船中商客於有罪科者任其國法可隨船主心事
- 右可相守此旨者也

御朱印

元和二年八月廿日

↓【註1】【註50】

▲『御當家令條』「慶祿記 十六・十七」のうち「御當家令條卷第十六」

條々

- 一 自伊祇利須至日本國渡海商船於平戸可賣買他所不許之縱雖遭風濤之難至本邦之地不可有異儀并諸役免除之事

- 一 船中資財隨所思以目錄可召寄事
- 一 不可有押買狼藉事
- 一 彼國人若有者病死輩者其荷物不可有相違事
- 一 船中商客於有罪科者任其國法可隨船主心事
- 右可相守此旨者也

御朱印 元和二年八月廿日

↓【註1】【註50】

《さ行》

▲『采覽異言』上 卷第一（十ウ／十一オ）

アンゲルア又云 渡呼アンギリヤ、意呼エンゲルタラ。

漢又刺亜 厄利亞

歐邏巴西北海中。有二大島。此國與思可齊亞。相分一島地。其一則喜百泥亜也。國在海中。俗善操舟。人亦勇悍。最習水戰。亦善作劍。號爲天下名器。番語劍云西南諸國。皆畏其人。以爲海賊。此亦呼番賊。云云。イ王惡聞其名。即下令禁市舶。不聽國人闌

出外洋。其國素習天教。教門十戒。他犯莫大焉。及王廢其妃。以  
妾爲妃。羅馬教王。以爲捨戒。乃與諸國共謝絕矣。「一事皆我初廢  
永年間耳」

長五年外。此國與和蘭人。各據一大船。共列泉州。明年復遣使來。厥後詳延  
得通海外。或真然也。及十八年秋。其船通曉。明年復遣使來。厥後詳延  
寶元年夏。其人不曉。及秋乃曉。

スコツテヤ和呼スコツトラ  
ト又シコツテヤ

思可齊亜

在歐羅巴西北海中。與漢又利亜。共分一島。其國在漢又利亜  
之北。

イペリニア和呼イ  
ルラフイ

喜百泥亜

歐羅巴西北海中大島也。與漢又利亜。思可齊亜。相接其界。

↓〔註4〕〔註5〕〔註25〕〔註29〕〔註44〕〔註49〕〔註58〕〔註61〕〔註  
62〕〔註63〕

▲『職方外記』『圖說歐羅巴卷二』（廿四オ／廿五ウ）（ ）内は守重によって省略  
された箇所で、傍線は筆者により、守重の本文との異同を示す）

西北海諸島

歐羅巴西海迤北一帯至水海々島極大者日諳厄利亜意而蘭大其外小島不  
下千百【意而蘭大經度五十三至五十八氣候極和夏熱不擇陰冬寒不需火  
產獸畜極多絶無毒物其國奉教之初因一王官之婢能識認真主遂及主后國  
王以訖一國其地有一湖挿木干内入土一段化為鐵水中一段化為石出水面  
方為原木也旁一小島島中一地洞常出怪異之形或云鍊罪地獄之口也】諳  
厄利亜經度五十至六十緯度三度半至十三氣候融和地方廣大分為三道其

「はじめて書かれたイギリス論」―その三―

学二所共三十院其地有怪石能阻声其長七丈高二丈隔石竝大銃人寂不聞  
故名襲石有湖長百五十里廣五十里中容三十小島有三奇事一魚味甚佳而  
皆無鱗翅一天静無風倏起大浪舟揖遇之無不破一有小島無根因風移動人  
弗敢居而艸木極茂孳息牛羊豕類極多近有一地死者不殮但移其尸於山千  
歲不朽子孫亦能認識地無鼠有從海舟來者至此遂死又有三湖細流相通達  
然其魚絶不相往来此水魚誤入彼水輒死傍有海窖潮盛時害吸其水而水不  
盈潮退即噴水如山高當吸水時人立其側衣一沾水人即隨水吸入窖中如不  
沾水雖近立亦無害【至迤北一帯海島極多至冬夜長數月行路工作皆以燈  
產貂類極多人以為衣又有人長大多力遍体生毛如獐猴產牛羊鹿甚多最大最  
猛烈一丈可殺一虎遇獅亦不避也冬月海水為風所擊嘗湧積如山人善漁獵  
山多鳥獸水多魚鼈人以魚肉為糧或磨魚為麵油為燈骨造舟車屋室亦可為  
薪其魚皮以為舟遇風不沉不破如陸走則履皮舟而行其海風甚猛能拔樹折  
屋及損人物干他處又聞北海濱有小人國高不二尺鬚眉絶無男女無辨跨鹿  
而行鶴鳥常欲食之小人恒与鶴相戰或預破其卵以絶種類又有小島其人性  
嗜酒任飲不醉年寿最長近諳厄利亜國】為格落蘭得其地多火以磚石障之  
仍可居處或宛轉作溝以通火焰所至便置釜甑熟物更不須薪其火赤終古  
不滅

↓〔註5〕〔註18〕〔註68〕

▲『新制天地二球用法記』(1)

『新制天地二球用法記』 一

悦尹掘蘭撥國府論田以北緯五十一度／三十二分

↓〔註12〕

## ▲『新制天地二球用法記』(2)

## 『新制天地二球用法記』二

## 一 第一百三十章

(b) 悦尹掘蘭撥國府ノ論田ノ地ハ、五十一度三十二分ノ北緯廿度ナリ、和蘭國府ノ曷無救得耳杳無ノ地ハ五十二度

二分四十二秒ノ地ト、拂郎察國府把列以救ノ地ニテ、學校ニ考フル処ナリ、都児孤國府ノ骨尹救旦の諾不屋簾ノ地ハ、四十一度ノ北緯度ナリ、加那亞太國府ノ苦物夜別竭ノ地

ハ、四十六度五十五分ノ北緯度ナリ、亜弗利加ノ南方ノ洲

崎、憂曷甫迭古手迭和甫ノ地ハ、三十四度ノ南緯度ナリ、

↓ [註73]

## ▲『新制天地二球用法記』(3)

## 『新制天地二球用法記』二

## 一 第一百四十四章

(b) 論動ノ地ト屋乱ノ地ト、憂曷甫骨曷救銀\*憂救銀歴ノ地ト

ハ、地中海ニ在テ、兀乎撥久數銀ト名ケ和語ニ黄金湊ト訳

スル、繆尹撥覆耳欽ノ地ハ、大概一同ノ日中ノ時ナリ、新悦

尹掘蘭撥國ノ薄数通ノ地ハ、四時十二分遅ク、憂曷甫骨

木綾ノ地ハ、十八時四十八分遅し、

↓ [註74]

## ▲『新制天地二球用法記』(4)

## 『新制天地二球用法記』三

## 一 第二百十三章

(b) スノ如ク、悦尹掘蘭撥國ノ、筒耳尹罰而ノ地内ノ、立然耳撥彪尹銀ト云フ所ノ在リ所ハ、和蘭語、速屋脉耳悦以蘭撥ト名ル島ヲ、此ニ夏島ト訳スル嶋ハ、悦尹掘蘭撥國語ニテ、別耳謬杳

救島ト云フ嶋ヨリ、立然耳撥ノ西南西ノ方ニ在リ、此二島ハ同シ曲線ニ近シト云ヘ氏、相向フ所ニ在リ、

↓ [註75]

## ▲『新制天地二球用法記』(5)

## 『新制天地二球用法記』三

## 一 第二百二十章

(g) 同ク論動ノ地ヲ西ヨリ東ニ旋シテ、時指モ前ノ如ク、十二

時ニ建テ、終リニ押採逸憂島ノ子午輪ニ至ル迄旋ラサ

バ、赤道ニ時ヲ顯シ、論動ノ晝過ハ、押採逸憂嶋ノ晝ノ時ニ

テ、論動ノ地ハ五時四分ニ子午輪ヲ通りテ、押採逸憂島ヨ

リ以前ニ子午輪下ニ至ルナリ、

↓ [註76]

## ▲『新制天地二球用法記』(6)

## 『新制天地二球用法記』四

## 一 第二百廿五章

## 第廿一の註釋

悦尹掘蘭撥國ノ文字有ルヲ解スル事

第廿一ノ註釋○地平器ノ上ニ記録有ル、悦尹掘蘭撥國、

名目八方ノ初文字、是レヲ勢爾瑪尼亞文字ニ解シ、吾等此器上ノ諸用ニ用ユル所ハ、下ノ文字ノ如シ

悦尹掘蘭撥國	勢爾瑪尼亞
--------	-------

↓〔註77〕

▲『新制天地二球用法記』(7)

『新制天地二球用法記』四

一 第二百三十三章

(c) 論動ノ地ノ赤道ノ高度ハ、三十八度廿八分二月廿日ノ太陽ノ距離ハ、廿度八分、都合此日ノ太陽ノ日中ノ高度ハ、五十八度三十六分ナリ

↓〔註78〕

▲『新制天地二球用法記』(8)

『新制天地二球用法記』四

一 第二百三十三章

(d) 論動ノ赤道ノ高度ハ、三十八度廿八分夏ノ日留ノ時候ノ太陽ノ大ナル距離ヲ加ル度数ハ、廿三度廿九分、論動ノ大ナル日中ノ高度ハ、合テ六十一度五十七分ナリ、是ヲ以テ又別法ヲ下ニ記スルナリ、

↓〔註79〕

▲『新制天地二球用法記』(9)

「はじめて書かれたイギリス論」―その三―

『新制天地二球用法記』四

一 第二百六十二章

(k) 南方ノ極輪ハ、論動ノ地ノ居住ノ人ニ見ヘスシテ、地平下ニ在テ、和蘭國府、曷無救得耳沓無ノ地及ヒ捏夜迭耳蘭撥國中ハ勿論、廿三度半ヨリ度数寡キ北緯度ノ所ニ當リテハ見ヘサルナリ、

↓〔註80〕

▲『新制天地二球用法記』(10)

『新制天地二球用法記』四

一 第二百六十四章

(w) 別子午輪ニ當ル晝夜平等ノ時ヲ知ラントスルニハ、子午輪ノ差ヲ初子午輪ニ求メ得ル時ノ差ニ加ヘルナリ、悦尹掘蘭撥國ノ論動ノ地、掘列哂尹味及ト云フ地ニハ、十時廿四分、拂郎察國把列以救ノ地ニハ、十時三十三分二十秒、和蘭國府、曷無救得耳沓無ノ地ニハ、十時四十三分五十六秒、厄日多國ノ曷歷謁參迭力逸尹ノ地ニハ、十二時廿五分ヲ加エ増スベシ、

↓〔註81〕

▲『駿府記』

慶長十八年癸丑年

八月

朔日諸士出土則於南殿御對面云々



二日從長崎花火上手唐人参府云々

三日花火唐人今日御覽則六日之夜花火可有御覽之由被仰出イゲレス今日候殿中獻猩々皮十間弩一挺象眼入鐵砲二挺長サ一間程之響鬨六里見之云々

六日捻檢校以下六十余人参府是者大久保石見守前出入之儀 御立腹為御佗言参府臨昏黑花火唐人於二之丸立花火 御覽宰相殿中将殿少將殿御見物云々

↓〔註48〕

▲『駿府政事録』(1)

『駿府政事録』御庫本 二 卷之三「慶長十八年癸丑八月小」

月小

朔日丁亥 諸侍出仕則於南殿御對面

二日 自長崎花火上手唐人参府

三日 花火唐人今日御礼則六日之夜花火可有

御覽之由被仰出伊毛連須今日候殿中猩猩皮

十間弩一挺象眼入鐵砲二挺長一間程之遠目金

六里見之

五日 土井大炊助為御使節自江戸参府

六日 惣檢校以下六十餘人参府是者大久保石

見守処出入之儀御腹立為御詫言参府云々臨昏

黑花火唐人於二之丸立花火 大御所宰相殿少

將殿御見物

↓〔註2〕〔註48〕〔註60〕

▲『駿府政事録』(2)

『駿府政事録』御庫本 三 卷之五「慶長十九年甲寅八月大」

十三日 南蠻人黒舟船頭御目見白糸巻物献之

↓〔註49〕

▲『西洋錢譜』(1) (三十六ウ／三十七オ)

按ズルニ以上十品ハ「エンゲランド」ノ錢ナリ「エンゲランド」ハ東西九十四度ヨリ二十二度半南北五十度半ヨリ五十六度半ニ至ルノ地ニシテ「フランス」國ノ北「デエ子マルカ」及ビ「スウエイデン」等ノ西海ノ内ニアリ最モ大島ニシテ数多ノ小島屬セリ其地三ツニ分レテ「エンゲランド」「スコットランド」「イルランド」ト云フ諸ノ王侯領主アリトイヘ凡今皆一王ニ屬セリ其都城ヲ「ロンドン」ト名ツク國ノ東ニアリ甚富貴ノ人多ク居シ其美麗四海ニ聞ヘアリ國中スベテ豊饒ニシテ諸物多ク産ス四方海岸ナルガ故ニ船ノ通行ヨロシク人民モ多ク居住ス數多ノ王國各皆錢アルンリ其國々紋印ヲ以テ考ヘ知ルベシ

↓〔註17〕〔註19〕〔註22〕〔註27〕

▲『西洋錢譜』(2) (四十八ウ／四十九)

銅錢 徑リ寸二分三釐重サ四錢七分表一人右ヲ向キテ立形チ左右ニ各一ツ城一ツノ船アリ縁國字廻レリ裏衆船湊ヘ入ノ圖アリ縁上ニ國字下

按ズルニ此一品ハ「エンゲランド」ノ人「カルタゲナ」ノ地ニヨイテ

↓  
[註  
71  
]

エゲレス

誼厄利亞インキリヤ氏云  
イキリス氏云

右ノ四箇國【筆者注：「イスパニヤ」、「亜媽港」、「呂宋」、「エゲレス」】昔ハ日本ニ

往來スト云トモ今代  
停止

↓  
[註7]  
[註9]  
[註23]  
[註53]  
[註64]

▲『泰西輿地圖說』(1)

計度

八九〔中略〕

以下略

↓  
〔註  
10〕

▲『泰西輿地圖說』(2)

エンゲランド

イル、ランド」ハ兩國ノ西脇ニアリテ別ノ大島ナリ

四九

以上二島分テ三ツノ俟国トナレルモノナリ其形  
南ハ廣ク北ハ尖リテ大躰三角タリ四方皆海岸ニ  
シテ數多ノ小島屬セリ

由來

「エンゲ、ランド」ト「スコット、ランド」ト兩國ヲ合セテ  
「ゴロヲト、ブリタニヤ」ト云ヘリ〈中略〉

↓「註22」

幅員

「エンゲ、ランド」「スコット、ランド」ト兩國ヲ合セテ見  
レバ實ニ「エ、ウロツパ」州中ノ大島ニシテ「イタル、ラ  
ンド」モ亦大イナリ今其二島三国ニ分テ爰ニ説ク

第一ハ「エンゲ、ランド」第二ハ「スコット、ランド」第三  
ハ「イタル、ランド」ナリ

第一「エンゲ、ランド」ノ地ハ南ノ方「モウタ」ノ海峽ヨ

リ北ノ方「スコット、ランド」ノ界イニ至ル「ドイツ、

ランド」ノ里程ヲ以テ計ルニ凡八十里本朝ノ里

其東西ハ海濱ヨリ海濱ニ至ルマデ凡六十里本朝

三千里

↓「註20」

風土

此地氣候常和ニシテ寒暑モホトヨク土地甚富  
饒諸穀野菜等悉ク能産ス只蒲萄酒ト蠶絲トヲ

産セズトイヘドモ革類毛織類ノコレニ替ベキ  
品アリテ一ツトシテ其用ヲ欠クコトナシ海邊ニ  
ハ多ク魚ヲ漁シ牡蛎ヲ産シ山谷ニハ錫銅銀ヲ  
出ス又良馬炭塩等ヲ産セリ中ニモ錫毛織類ハ  
他國ノ産ニスグレタリ土俗ハ、總テ天性勇強ニ  
シテ能學術ヲ究メ自ラ教道ニ達シ諸藝皆他國  
ノ人ニ勝レリ

↓「註26」

分州

「エンゲ、ランド」ハ分テ二州トナス然レトモ其大  
小同ジカラズ〈中略〉

其一ハ王国「エンゲ、ランド」ノ地ニ屬スルノ諸国

一ハ「ケント」ナリ〈中略〉

二ハ「エツセキス」ナリ〈中略〉

三ハ「シュツセキセ」ナリ〈中略〉

四ハ王国「ウエスト、セキセ」ナリ〈中略〉

五ハ「ヲタスト、アングレン」ナリ〈中略〉

六ハ「メルシ、ア」ナリ〈中略〉

七ハ「ノルト、ミュンベル、ランド」ナリ〈中略〉

其ニハ小侯国「ワルレス」ナリ其地西南北ノ三方ハ

皆海岸ニシテ東一方ノミ「メルシヤ」ノ地ニ續ケ

リ此国中分テ二ツトス

一ハ侯國「ノルトワルレス」ナリ〈中略〉

二ハ侯國「ソユド、ワルレス」ナリ〈中略〉

↓〔註22〕

#### 幅員

「スコット、ランド」ハ「エンゲランド」ヨリ小國ニシ

テ南方ノ堺ヨリ北方ノ海濱ニ至ルマテ「ドイツ

ランド」ノ里程ヲ以テ計ルニ凡五十里本朝ノ百余里ニ

過ス東西ハ海濱ヨリ海濱ニ至ルマテ凡三十里

本朝ノ六ノ十余里ニ及バザルノ地ナリ

↓〔註20〕

#### 風土

此地惣テ寒氣甚シク国中山多シ〈中略〉土俗ハ皆愚

魯ニシテ「エンゲランド」ノ如クナラズ殊ニ北方

ノ地及其諸島ニ住スル人ノ如キハ天性極テ野

鄙ナリ然レドモ近歲ハ「エンゲ、ランド」ヨリ其教

ヘヲ施シテ畧々其道理ヲ辨知スルモノアリト

云ヘリ

↓〔註26〕

#### 分州

其一ハ南「スコット、ランド」ナリ〈中略〉

其二ハ北「スコットランド」ナリ〈中略〉

其三ハ「スコット、ランド」ノ海中ニアルノ諸島ナリ

「はじめて書かれたイギリス論」―その三―

一ハ「テ、ウエ、ステル子ス」ノ諸島ナリ〈中略〉

二ハ「トルカチセ」ノ諸島ナリ〈中略〉

三ハ「ヒット、ランド」ノ島又「シケット、ランド」ノ島ト

云ヘリ〈中略〉

↓〔註22〕

#### 幅員

「イタル、ランド」ノ地モ亦「エンゲ、ランド」ヨリハ小

國ニシテ南北海岸ヨリ海岸ニ至ルマデワツカ

ニ「ドイツ、ランド」里ノ七十里本朝ノ九百  
四十余里ニ過ス

東西モ亦廣キ所ヲ計ルニヤウヤク三十里本朝  
ノ九朝

餘ニ至レリ

↓〔註20〕

#### 風土

此地氣候常和ニシテ野菜果實多ク麻蕃紅花等

ヲ産シ又マキアリテ諸畜ヲ出シ海邊ニハ多ク

鱒ヲ産スト云ヘリ土俗ハスベテ善人少ナク諸

藝悚惰ニシテ性惡虚偽ノ人多シ〈中略〉

↓〔註26〕

#### 分州

其一ハ「ユルステル」ナリ〈中略〉

其二ハ「コンナユクト」ナリ〈中略〉

其三ハ「レイン、ステル」ナリ〈中略〉

其四ハ「ミユンステル」ナリ〔中略〕

↓〔註22〕

属國

昔時ハ「エンゲ、ランド」「スコット、ランド」「イルラン

ド」ノ三国共ニ皆小侯領王アリテ各私ニ政事ヲ

ナシタリシガ其後ハ「エンゲラント」ノ惣王ヨリ

コレヲ從ヘテ其王城「ロンドン」ニ朝貢サセシメ

リ又近歲四大州ノ内ヲ攻取テ其属國トスルモ

ノ甚多シ

↓〔註20〕

▲『泰西輿地圖説』(3)

『泰西輿地圖説』辰 泰西圖説卷之十七(五ウ／六オ)

西洋ノ千六百七十六年<sup>本朝ノ延宝五年</sup>ニ當テ「エンゲ、

ランド」王「カアレル」性ノ第二世ノ時「ヨハン、ウヲ々

ド」ト云ヘル「カビタン」日本震旦韃靼等ニ北方ヲメ

グリテ來ラント二艘ノ舟ヲ出シタリシガ時節ア

シク冬月ニ至リテ「スピッツ、ベルゲ」ノ邊ヨリ氷海

ヲ廻リテ「ノヲハ、セムラ」ニ至リシニ海水皆氷トナ

ツテ氷上ニ降リツモル雪山ノ如シ故ニ舩行スル

コトアタハズ氷岸ヲメグリテ「ノヲハ、セムラ」ノ地

ニ至テ是非ナク國ニ歸リタリ此時其海中ニ於テ

海馬ヲ多ク見タリ氷上ヲ走ルヲ努メ

以テ射トメントス然ルニ皆氷下ニク  
グリテ是ヲ取ルコトアタハズ爰ニ於

テ\*魚<sup>モリ</sup>ヲ以テ氷中ニ突トメテ漸兒海 \*注(稽)ヤスの異字体

馬一ツヲ得タリ舩中ニ上ゲテ見ルニ

甚大イニシテ凡長サ一丈四尺バカリ

其齒亦甚大イニシテ象牙ヨリモ猶美

ナリト

↓〔註16〕〔註72〕

《な行》

▲『長崎旧記』(1)「長崎旧記目錄」〔長崎旧記卷第二〕(517, 539-540頁)

一阿蘭陀人平戸より長崎江引越御上使之事

附暗喜里阿蘭陀種咬囉吧御追放事

〔中略〕

阿蘭陀人從平戸長崎へ引越御上使之事

附暗喜里阿蘭陀種子咬囉吧江御追放

一慶長之比より寛永迄四拾二三年之間阿蘭

陀人肥前之内平戸へ渡海して商売ニ

高利を取町屋ニ徘徊シ心俣ニ家居ヲ造令

自由処寛永十五寅年松平伊豆守嶋原婦

陣之節平戸へ被立寄阿蘭陀居所見分

之不相応ニ要害ラシク有之故悉破

却被申付帰国也翌十六卯年為上使井上  
筑後守邪宗門改ニ長崎<sup>江</sup>被越長崎ニ有之  
エケレス阿蘭陀種子平戸へ被相渡彼  
地ニ有之阿蘭陀種子共不殘エケレスノ  
子一所ニ咬啗吧ニ被流其跡阿蘭陀人  
平戸渡海<sup>之</sup>儀寛永十八巳年御停止  
と成此年より出嶋ニ押籠候奉行馬場三郎  
左衛門柘植平右衛門

↓ [註11] [註52]

▲『長崎旧記』(2)「長崎旧記卷第四」(566頁)

エケレス人平戸渡海之事  
一慶長五子年阿蘭陀一所ニエケレスアンジト  
云者相渡り阿蘭陀ヤンヨウス同前ニ慶長  
四<sup>マ・メ・十四</sup>年日本海渡御赦免之御朱印被成下候  
依之慶長十七子年ヨリ平戸江十年余  
渡海シテ雖致商賈次第ニ利潤無之故  
以來渡海仕問敷由訴之元和七年ヨリ  
渡海止

↓ [註47] [註51]

▲『長崎旧記』(3)「長崎旧記卷第四」(566-567頁)

長崎へエケレス船一艘來朝之事

一寛文十三庚丑年五月廿五日ニ野母深堀遠

見番所より阿蘭陀船一艘見え候由奉行岡野  
孫九郎方<sup>江</sup>注進ス依之阿蘭陀人ニ檢使通

詞差添旗合ニ遣候所阿蘭陀ニテ無之エケ

レス船也エケレス<sup>之</sup>儀渡海相止候所ニ何トシ

テ乗渡候やト詮議有之候へハ先年商売

トシテ平戸<sup>江</sup>数年相渡り其後四十年之間中

絶仕候以來日本渡海御赦免蒙度為訴訟

エケレス国ヲ類船三艘ニテ去ル亥ノ年本国

ヲ出船仕候テハンタント申所<sup>江</sup>渡一艘ハ東

京へ遣二艘類船去年六月高崎<sup>江</sup>参候順風

無御座滞留仕今一艘ノ荷物も此船ニ積類

船ハハンタンニ遣候是も跡より入津可仕と存候由

申上ル宗旨<sup>之</sup>儀被遂吟味候処南蛮人一

類ノ宿ニ<sup>而</sup>無御座候然共近年南蛮国ホル

カル頭ノ娘ヲエケレス頭方へ嫁候故国中ノ

者南蛮ノ交も仕候併切支丹ニハ格別に<sup>而</sup>

阿蘭陀同前ニ御座候ト申出ル右之趣早速

江戸へ注進有之近国ニモ段々相知御用心有之

然所エケレス人訴訟不相叶同七月廿六日ニ被

追帰

エケレス帰帆ニ船中兵糧無之ニ付荷物払

ハセ代金貳百六十兩三分銀九匁内百七拾貳兩三分船中喰物諸色ニ<sup>而</sup>渡残テ八十

八兩金ニ<sup>而</sup>持渡

エケレス船 長拾九間 横三間四尺七寸

深サ十三間 艫ニ<sup>而</sup>高サ四間

玉藥武具 鉄炮八十三挺 鋸三百卅九腰

鐵廿六 石火矢藥卅五桶同玉六百八十四小玉五桶

右之分在津之内取揚ル此外石火矢數十挺船

ニ在リ

エケレス カヒタン名 セイモンデルホウ

惣人数八十六人カヒタントモ

一ケレス「ママ」此度御朱印可致持参事ニ候へ共數十

年中絶故か日本渡海御赦免状ノ内ニ<sup>而</sup>差

出候物令披見所 御朱印ニテハ無之平戸より

持渡候日本文字ノ物ニ<sup>而</sup>候此時ニ至テ御朱

印之様子不分明

↓「註53」

▲『長崎古今集覽』下卷之十二（二九八頁）

阿蘭陀人と南蛮人と炮戰之事

○又（長崎拾芥）云、エケレス慶長十七子年始テ商売トシテ平戸ニ渡

海ス

↓「註47」

▲『長崎雜記』について、『長崎旧記』を見よ

▲『長崎雜話』(1)

阿蘭陀ゑけ連須人一艘に乗組初て國主江來禮

之事附御朱印頂戴之事

一慶長五庚子年泉州堺浦ニ不見馴大船壹艘着

岸ス遂吟味之処爲商賣初メ而咬啮吧より

阿蘭陀人ゑけ連須人相渡候と申候ニ付早速江府江

注進致す江戸江廻船可致由被仰付出帆ス

海中過半乗出シ遭難風相州浦川ニ打寄

破船ニ付乗組人数陸より江戸江被召御詮議之上

彼者共申上候ハ日本渡海之儀蒙御赦免度爲訴訟

初メ而來禮仕候於御赦免年々致渡海商賈

仕度由奉願乗船無之故八九年も逗留致す

其内御扶持方等拝領被仰付阿蘭陀頭人

屋んよう須ゑけ連須之頭人あんじと申者

逗留之間折節御城江御召異國之儀共

御尋に付段々申上ル就中やんよう須儀者

首尾能相務右兩人之者共江屋敷等拝領被

仰付致作事令住居於今江戸やんよう須

居屋家をやようす可し阿んし居候処を阿んじ

町と申候

↓「註43」「註44」



▲『長崎雜話』(2)

一阿蘭陀人ゑけ連須人乗船無之ニ付八九年

之間江戸に而滞留候処慶長十三申年

阿蘭陀船一艘肥前之内平戸江着船ス彼

者共申候ハ先年阿蘭陀初メ而日本ニ越候船於

杯今歸國不仕に付無心先存行末を尋候爲ニ

此地江罷越候よし申出候平戸領主松浦壹岐守方より

江戸江注進有し早速阿蘭陀人之頭人江戸江

可差越由に而檢使を添差越於江府御詮議

之上逗留之阿蘭陀ゑけ連須御返し被成然共

やんよう須は江戸江在留仕度由願申により

其儘差置候以來日本ニ相渡商賈之儀も此時

御赦免則御朱印頂戴被仰付候

権現様御朱印之写

阿蘭陀船日本江渡海之儀何之浦雖爲着

岸不可相違候向後守此旨無異儀可被往來

聊疎意有間敷候也仍而如件

慶長十四年七月廿五日

御朱印

ちやく須くるうんへいけ

↓「註45」「註46」

▲『長崎雜話』(3)

ゑけ連須人平戸江渡海之事

「はじめて書かれたイギリス論」―その三―

一慶長五庚子年阿蘭陀一所とゑけ連須あんじ

といふ者相渡り阿蘭陀人屋ん屋うす同前に而

慶長十四年日本渡海御赦免之御朱印

被成下候者慶長十七子年より平戸江十年余

渡海して雖商賈致次第ニ利潤無之故已來

渡海仕間敷由訴之元和七年ヨリ渡海を止ム

↓「註47」「註51」

▲『長崎雜話』(4)

長崎江ゑけ連須船一艘來禮之事

一寛文十三庚巳年五月廿五日野母深堀之遠見

番所より阿蘭陀船一艘見江候由奉行岡野孫九郎

方より注進スおらんた人杯檢使通詞差添江旗合ニ

遣候所杯阿蘭陀ニテ無クゑけ連須船也ゑけ

連須之儀渡海相止り候処ニ何として乗渡候やと

詮議有之候得共先年為商賈平戸江数年

相渡其後四年「マ」之間中絶仕候以來日本渡海

御赦免蒙度為訴訟ゑけ連須國を類船

三艘ニテ去ル亥年本國を出船に而はんたん

と申所江相渡壹艘ハ東京に遣二艘類船

に而去年六月高砂江参候順風無御座

帶留仕今一艘之荷物を此船ニ積み類船ハはん

たん遣是も跡より入津可仕と存候由申上る

宗旨之儀被遂吟味候処ニ南蛮人一類にて者  
これ無御座然共近年南蛮國はるとかる  
頭之娘をゑけ連す頭方江嫁し故國中之者  
南蛮之交を仕候併切支丹ハ格別に而  
阿蘭陀同前に而御座候と申出る故に而早速  
江戸江注進有之近國にも段々相知連  
御用心有之度とゑけ連須人訴訟不相叶  
同七月廿六日ニ被追歸

ゑけ連須歸帆ニ船中之糧糧無之ニ付荷物  
拂せ代金式百六拾兩三步九匁内百七拾  
式兩三步船中之食物諸色ニ而渡ル残テ  
八十八兩金子に而持渡ル

ゑけ連須船

長サ十九間

横三間四尺五寸

深サ三間「ママ」

艀ニ而高サ四間

玉葉武道具

鉄砲

八拾三挺

釵

三百三拾九腰

鎧

廿百六「ママ」

石火矢葉

三拾五桶

同玉

六百八十四

小玉

五桶

此之分在津之内取揚ル此外石火矢數十挺  
船ニ有リ

ゑけ連須かひたん名

せいもんでるほう

惣人数八拾六人かひたんとともに

一ゑけ連須此度御朱印可致持渡所ニ候へとも

数十年中絶故カ日本渡海之儀御赦免状

之内ニ而差出シ物令披見処ニ御朱印ニ而ハ無く

平戸より持歸ル日本文字之物ニ而候此時ニ至リ

御朱印之様子分明なら須

↓「註30」「註53」

▲「長崎実録大成」第七卷「諸厄利亜船入津之事」(二七九―二八〇頁)

諸厄利亜船入津之事

一延寶元癸丑年五月廿五日諸厄利亜船一艘入津セリ。則通詞ヲ以如何

様ノ訣ニテ渡來ルヤト御尋有之。彼者共昔年阿蘭陀人同前ニ商賣御

免ノ御朱印頂戴シ數度平戸ニ相渡シ處、其後國用繁ク、四拾餘年中

絶ニ及、仍テ其節ノ御書ナル由書物一通持渡レリ。則御披見有シニ、

御朱印ニテハ無之、平戸ニテ取合セシ日本文字ノ書物ナリ。先ツ宗

門ノ儀御尋有シニ、我々ハ御法度ノ切支丹宗門ハ曾テ用ヒ不申旨答

之。然ルニ諸厄利亜人ト阿蘭陀人兼テ不和ナル由ナリシカ、此度阿

蘭陀人訴出ルハ、近年諸厄利亜國主ノ方ニ布留都葛兒國主ノ娘ヲ令

嫁ユへ國中ノ者共、常ニ南蠻人ノ交リ親シク有之由訴之。

船中頭人名 セイモンゲルホウ「ママ」

惣人數 八拾六人

船ノ長サ 拾九間 横 三間四尺七寸

深サ 三間 艫ニテ高 四間

鐵砲 八拾三挺 劔 三百三拾九腰

鎗 二拾六筋 塩硝 三拾五桶

石火矢玉 六百八拾四 小玉 五桶

右之分滞船中此方エ取上置。

其外石火矢數拾挺船中ニ有之。

右之趣委細江府言上有之。近國大名諸家ヨリモ人數ヲ差越シ警固アリ。日ヲ經テ江府ヨリ御下知有之、向後渡海水々御停止ノ旨被仰渡、七月廿六日令歸帆ラル。但此船糧米等無之由依願、荷物ヲ賣拂セ、代銀高金子ニテ二百六拾兩三分銀九匁有之。此内ヨリ百七拾二兩三分糧米並諸色代相拂、殘金八拾八兩持歸ラシム。

↓「註31」「註53」

▲『長崎夜話草』『長崎夜話「エ」之卷』（〇五ウ／〇七オ）

○エゲレス船日本江來ル始之事

諸厄利亜國ハ紅毛國に近き嶋國にて豊饒ノ水土およそ日本程乃國なるよし此國の船商賣として天正八年庚辰の夏初て平戸江來りて商賣し是より毎年渡海する事二十年計慶長五六年に至りて商物利徳すくなし先々當年を可きりて帰るへし国主へ相談し其旨に満かせて又く來朝すべしと平戸

「はじめて書かれたイギリス論」ーその三ー

乃館主へ訴へけるにその意に任すべしとありけれハ沙らバ又重ねて來らん時のためなれバ御朱印を可給と願ひしかハ則關東へ此旨おほせつかはされしに望みにかませ給ひて御朱印をそ給はりけるゑげ連須悦びて是を持かへりぬされと國主もいかゞおもひけんその、ちハ渡海する事もなかりしすへて此國乃人ハ紅毛よりハ義強く心猛き風俗にて貪るころすくなきにやおのれより祢がひて渡海を止めしも世のいきほひを能見知たるゆへにやと覺ゆそれよりハ絶て來る事なか里し然れとも世うつり時あらたまりぬれハ又いかなる幸ひにある事もやとおもひけん延寶元癸丑の年五月ゑげ連須船一艘長崎の津へ來りて古乃ことく商賣ゆるされん事を願ひ前の御朱印を持來れり則刺史岡野氏江府へ達せられぬ御免なくて七月帰帆す真乃御朱印をハ國王乃藏におさめ置たれバそれを毫髪もたがへず透うつして持渡れりとかや船も人も紅毛蠻人等にかハリなしいつれ種類に近ければ紅毛船乃うへに又此船をは御ゆるされなきもことわりにや是も猶又日本に執心残りぬるにやとおしはかり侍りぬ

↓「註24」「註65」

《は行》

▲『萬國記』

○エゲレス 七十四 諸厄利亜インキリヤ臣イギリス臣

阿蘭陀ノ西ニアル嶋ナリ日本ヨリ海上一万千七百里人物ヲランダニ似タリ昔ハ平戸へ年々入津セシカトモ商賣利ナキ由ニテ手前ヨリ退テ不來寛文ノコロ此船一艘長崎ニ來テ以前ノ如日本渡海商賣ヲ願トイヘトモ免許ナシ其舟阿蘭陀舟ニ少シモカハリナシ橋ノ上ノ旗阿蘭

陀卜別也

↓「註9」

《や行》

▲『洋記異國渡海船路積』

いんけ連須の國右同

壹万千七百里

おらんだ國右同

壹萬千九百里

↓「註15」

▲『輿地各國積解』

輿地各國積ハ元拂郎察フラスニテ測得所

也則一級ノ数也和蘭人是ヲ本國ノ

道里ニ譯シテ二級ニ置タル書アリ

今はヲ日本ノ道里ニ譯シ三級ニシ

ルシテ人ノ見易カラシムヲ欲ス

輿地海陸積

地周三百六十度

全面度四百一十二度五二九五二

拂郎察測

和 蘭

日 本

一度ヲ六十里ト定テノ  
一里四方ヲ一トス

一度ヲ十五里ト定テノ  
一里四方ヲ一トス

一度ヲ三十里ト定テ  
一里四方ヲ一トス

《中略》

日本

〇〇〇一八〇〇〇

〇〇〇〇七三七五

〇〇〇二九五〇〇

コロートブ

〇〇〇〇七二九二六

〇〇〇〇四五五八

〇〇〇一八三三一  
二分之一

リタテン

↓「註21」

▲『輿地國名譯』

入尔馬尼亞

ゼルマニア

邏馬

ローマ

勿尼齊亜

ベニシア

叭勤逸戸

パレイス

隆動

ロンドン

応帝亜

インデア

哥亜

ゴア

齊狼崙

セイロン島

為置亜

ゴイ子ア

都可友太吸掇

ヨーハンダーヒッツ

太吸掇ノ峽

ダーヒッツの峽

咻之從耳ノ湊

バーイハンヒユツソン

↓「註82」